

『花展』 出展への道のり

千葉県木更津市 橋本卓雄

二〇〇七年三月二十四日、国立科学博物館（東京）創立百三十周年を記念して企画された「花展」は華やかにオープンしました。開催期間は三月二十四日～六月十七日の約四ヶ月間でした。日本花莖蒲協会の出展は四月四日～十七日の二週間でしたが、その期間だけでもなんと三万人近くの来館者があったと聞きます。「花展」の詳細については本協会の顧問である岩科司先生の記事をお読み下さい。

思い起こせば本協会が「花展」に協賛の意を固めたのは一年前の二〇〇六年二月頃でした。ある日突然清水理事長から相談したいことがあるとの電話を受けたのが事の発端でした。電話の様子では相当悩んでいるのが感じられました。大きな理由として①顧問である岩科先生から直々の頼み事であることと②同じ時期に例年の行事である展示会を大船に在る神奈川県立フラワーセンターで行うために重複してしまうことでした。しかも問題はそれだけでなく二週間の長丁場に展示するに耐えうる品種数と鉢数の確保、特に前半の

一週目は早咲種で対応と言っても関東地区ではようやく咲き始めた品種がぼちぼち出始める程度でしたから会員有志からの調達はほぼ絶望的であることと、二週間毎日休み無く続けなければならぬ展示花鉢の仕立てと管理作業を行う人手（当番者）の問題があり、後半の二週目は完全に大船展示と重なるので目途が立たないことでした。

私も即答できないので一晩考えさせて下さいと言つてその日は一端電話を切りました。直ぐにでもその場で「その話は無理ですからお断りします」と言えば楽になるのに正直言つて生来お人好しの自分が恨めしく思いました。それからが大変で頭の中は解決策を考へることで一杯一杯、人の話は上の空で家内からは苦情を言われる始末でした。そのような中で考えついたのは次の二点でした。第一に橋本は大船展示から外してもらい東京「花展」専任で行い展示花も私の持つ全てを「花展」に充当し当番者も数名確保する、第二に前半一週目の早咲品種の確保は鳥取在住の山脇信正氏に協力を仰ぎ内諾を得ることでした。

七六十鉢になりました。
一ヶ月後には出展開始となる五月には緊張も高まり最後の確認作業が行われました。展示初日の前日は休館日なので花鉢が搬送業者に依つて続々と屋外に設置されたビニールハウスに運び込まれ、予め用意された展示図面を下に総動員で舞台作りです。緋毛氈の敷設、金屏風及び衝立の設置、展示花の選定、丹波鉢での飾り付け等々一刻を惜しんで作業が進められ、明日の初日を気にしながらお互いにご苦勞様でしたと言葉を掛けあいながらその日は無事解散となりました。

幸いにも山脇さんはこの相談に快く応じて下さいました。山脇さんは会報の中でも紹介してありますが中咲種を早咲種に変える天下一品の栽培技術を持つておられる方で通常では六月頃に開花する品種であつてもなんと正月頃に咲かせてしまうほどの人です。又、第一の件は緊急理事会を開き「花展」専任は橋本と清水理事長の二名で行い毎日の当番も逐次詰めることで大筋がようやく固まり椎野会長から両展示会を成功させるために一丸となつて頑張るようにとの叱咤を受けて出発進行となりました。

翌年六月の展示会に向けてやるべきことは山ほど有り一年があつと言う間に過ぎて行きました。主な事項は①展示鉢の搬送（配車）計画、搬送業者との交渉②予算計画③展示図面の作成及び現場検証④各種備品類の調達⑤控え花鉢を収容する大型ビニールハウスの設置⑥当番者の編成⑦展示場所の交渉⑧出展品種と鉢数の確保⑨図録原案の作成⑩協会チラシの作成等々でした。⑧については最終的に三六二品種

事はスムーズに行かないものです、初日の朝当番の方から緊急連絡が入りました。「お客様は続々と来館しています。でも花弁の状態がおかしい、観賞できる状態ではありません」とのことでした。急ぎ近場の方で対応できる小林昇理事が現場に急行し、その場を救つて下さいました。
本来、花鉢の飾り付けはその日最高の状態で開花したものを展示するのが常識ですが館側の時間的制約と朝当番の人員確保に無理があり、従つてその日の開館直前に展示の飾り付けが出来ないこともあつて前日の夕刻に行うことにしました。ところが室内空調設備がたとえ完璧であつても日光はもとよ

り外気に触れることが出来ない環境、即ち空調設備により一定の湿度と温度が保たれていることは花卉が成長するうえで一見良さそうに思われますが実はそうでは無かったようです。開花状態の花では弁先が水分を抜き取られたように縮み上がり張りのある花卉が失せてしまい、開花寸前の蕾も花卉が開ききらずに蕾にまとわりついたままでした。素人の考えですが、微妙な温度・湿度の変化も花卉の成長を促す要因の一つではと思った次第です。

急遽当番の組み直しと朝の展示飾り付けに切り替えることにしました。このことで二週間の早朝当番者には大変な苦勞を掛けてしまいました。会期中に大きなトラブルはこの一件だけでした。花菖蒲園で観るのと異なり千変万化の花模様とその魅力を間近で存分に観賞された方々は満足されておられたようでした。見学者の邪魔にならないように展示花の点検に行くと質問攻めに会いましたが熱心な方々との触れあいには疲れも吹き飛ぶ思いでした。

二週間休み無く毎日の当番でさすがに疲れも溜まってきましたが、最終日には大勢の来館者で賑わい、お陰様で有終の美を飾ることが出来ました。

最後に主催者である朝日新聞社事業本部文化事業部の小渕洋子様からお言

葉を頂きましたのでご紹介したいと思えます。

『ハナシヨウブは日本が世界に誇る花ですが、一般の方が実際の生花を見る機会はなかなかありません。』

「花展」では、日本花菖蒲協会の皆様のご協力により、様々な種類の見事なハナシヨウブを展示することができました。美しい色と形のハナシヨウブを間近に見る機会に、来場者からは大好評を博しました。

朝晩の花の入替えや水遣りのために博物館に日参して下さった協会の皆様、あらためて御礼申し上げますとともに、この「江戸の粋」、ハナシヨウブを守っていつていただくよう、協会の益々のご発展をお祈り申し上げます。』

尚、今回の出展に協力頂いた会員諸氏に御礼申し上げますと共に氏名を列挙させて頂きます。(敬称略)

椎野昌宏、清水弘、福住康文、小林昇、山脇信正、田淵俊人、東秀光、金子嘉明、金子紀久子、村井醇、金子キミエ、松本祥子、山口義晴、小山章治、佐々木雅純、石井湜、武内暢宏



